

なほ

6月号
vol. 076

特集・都市のインフラ
わが町の医療



なほ
リレ+なほ+トク

「西成で働くパパ・ママたち」

マヨロシナ
あひろのま

わが町の医療

—くろかわ診療所と訪問看護ステーションから—



黒川渡さん
(くろかわ診療所長)



江頭真由美さん
(訪問看護ステーション
鶴見橋看護師)



私たちが仕事し暮らす西成という町へのイメージは、よい印象で語られることは少ないと思います。とくに北部、大まかにいえば西成区の北部3分の1までの位置には、堺筋線東に飛田遊郭、西に釜ヶ崎、さらに西方面を走る26号線をはさんで西には被差別部落があります。このエリアは行政の特区構想や生活保護者へのパッシングなどで注目を浴びながら、貧しさといわれのない差別や排除を体験してきた人々が暮らしています。そのうえで、人権や福祉政策が求められる場所としても認知されているのです。

この町にはさまざまな国籍の外国人、在日、沖縄出身者など歴史的にハンディキャップを負う人たちも多く住みます。古くは木津川の港湾労働や、万博イベントの土木労働などに従事するため、全国からこの地に流入してきた人たち。そして東アジア、東南アジアなど異

文化を運んできた人々が集積する場所としてこの町を築いてきたのでした。もともとアジールな、つまり人種や多種多様な文化を持つ人たちが相互に支えあう西成には、今も国内外から越境してくる人たちが多く、それゆえこの町が多文化都市、異文化地域と呼ばれるのも必然です。一方で生活の差異が明確にあらわれてしまうこともあります。それは、まちの汚染やゴミ、人やペットが放つ糞尿の臭気などの無秩序が、貧困や道徳観の違いなどとして顕著にあらわれます。日常の生活スタイルがあらわになっているといえるでしょう。

おそらく排除や差別的感情のみなものには、そんな生活様式への反発があるのでしょうか。そんな状況を文化の違いとして蔑視することではなく、あたりまえに違う社会として許容しあうとともに、文化や歴史の違いを知る必要があると思います。

一方で、身心の不健康な生活スタイルは、自らの精神や肉体をむしばみ、重大な病気に罹患する人たちも多いのです。栄養の欠けた食卓、バランスの悪い食習慣、アルコール、タバコの過度な摂取、競馬やパチンコなどのギャンブルなどが、肉体的精神的に重篤な疾患や障がい、依存を発症させたりもしています。その結果、ますます自らの居場所を失い、肉体や心の病を深くしていきます。

今回は、鶴見橋商店街の一角で開院する「くろかわ診療所」の内科医、心療内科医である黒川渡医師と、「訪問看護ステーション鶴見橋」で地域医療にかかわる江頭真由美看護師に出席していただき、私たちの生活圏で、診療や訪問看護を利用する人たちの、日ごろの表情を確かめながら、この町の大切なこと、この町の医療の現実など医療を越えて話しあってみました。

さまざまな課題

「僕らのやっている作業は、一つに絞ることができない。いろんな問題が重なり合い、まとまりを持って解決できないことばかり」と黒川さん。診療所に訪れる人たちは、商店街周辺の人たちだけにとどまらず、日雇い労働者や単身高齢者、母子家庭のお母さんや在日外国人、障がい者などさまざまな人たちが来る。中にはコミュニケーションの難しい人たちもいる。

「医療や福祉に加え、あるいは社会的に何らかのつながりを持つことができない人たち、あるいは余裕のない人たち、行き場のない人たちが多い」と黒川さんは言う。西成の複雑な問題や課題が、そのまま個々の患者の問題として、あらわれてきているということだろう。「医療だけでは解決できない社会的問題はどこの地域も同様だが、この町は課題解決の意味が大きい地域といえる」と話す。

看護師の江頭さんは「訪問看護は医療行為を入口にした生活支援、お手伝いである」と話す。「意識して生活習慣を変えることができず症状の悪化を招く、住環境を整えることができない、あるいは、計画的にお金を使うことができず食事が十分に摂れないなど、疾患への対応の前に生活環境を把握することが重要である」。江頭さんの役割が、患者さんの生活への応援にあることを強調した。

黒川さんも「結局はその人に関心を持つことやね。例えば、薬を変えてほしいと欲求してくる人がいる。あちこちの病院の薬をもらってくる人もね。薬の調合の問題であっても、やっぱりその人と一緒に考え、どうするのかを決めやってみることが大切だと思う。つまり最後は信頼関係をつくる事なのかなと思う」と言い、「いつでも寄港(相談)でき、いつでも停泊(治療や回復)し、いつでも出港(ステッパアップ)できるプロセスがあること。そして再びここ(診療所)に帰る」と話す。

敗北感

ここで黒川さんが語る医療現場の話に移る。

「精神的にダメージを受けた人は元気を忘れてしまう。〇〇病というラベルにとられ自信をなくし、それまでの活発な対人関係や社会とのつながりから孤立する傾向を持つ」。そのうえで「現在の医療現場では、高い医療費、診療科目により、相談に乗ってもらえないことがあったり、救急搬送時に有料個室しかないと言われたりすることなど、見捨てられると感じてしまうような出来事も多く、ますます不安を増幅させてしまう」。黒川さんの現場からの感覚がリアルだ。

「意識して生活習慣を変えることができず症状の悪化を招く、住環境を整えることができない、あるいは、計画的にお金を使うことができず食事が十分に摂れないなど、疾患への対応の前に生活環境を把握することが重要である」。江頭さんの役割が、患者さんの生活への応援にあることを強調した。

黒川さんは「結局はその人に関心を持つことやね。例えば、薬を変えてほしいと欲求してくる人がいる。あちこちの病院の薬をもらってくる人もね。薬の調合の問題であっても、やっぱりその人と一緒に考え、どうするのかを決めやってみることが大切だと思う。つまり最後は信頼関係をつくる事なのかなと思う」と言い、「いつでも寄港(相談)でき、いつでも停泊(治療や回復)し、いつでも出港(ステッパアップ)できるプロセスがあること。そして再びここ(診療所)に帰る」と話す。

黒川さんは診療について、「医療現場での連携ができるだけつながるような方法を考えるようにしている。たとえば外科から精神科へのつながりを、本人のために誠意を持って、あるいは医療への信頼を作るようにして作業している」と話す。「これからの医療はどうなるのか。こんな小さな診療所でさまざまな課題を持つ人たちが来院してくる。大病院と比べてスタッフ、所長の精神的負担も大きく強いられている。西成の医療、福祉の現場で働く人は、現在の課題の多種多様さと壁の高さに、日々直面している。」と医療現場の脆弱さを指摘する。

江頭さんは、「以前は医療行為を通して患者さんとの関わりが深まっていくことを実感できた。苦勞もあつたが看護師の技術の信頼が看護師への信頼へと変わっていく、その逆もあつた。サービスの利用者として提供者というだけでなく、人と人との関係が生まれていた。しかしながら

を下ろして戻れる場所にした」と、患者を旅する海人にたとえて話してくれた。

生活保護は毒と薬

佐々木が「同じ失敗の繰返しをする青年がいる。僕らのものを何度も逃げたり帰ってきたりする。しかし、彼には常に私以外のどこかに頼る場所も持っている(もちろんそこが常に彼の欲求に届えてくれる場所とは限らないが)。それでも一晩二晩を厄介になりえる場所とわかっており、そこがその場しのぎの対応であっても、生きるすべを心得ている。生活能力が低いとはいえ、最低でも人にすがって生きていく力を備えていて、周期的に同じ過ちを繰り返す」と話題をふると、黒川さんは「世間とは利用し、利用されて成立しているもの。頼る人がないと考えられる場合でも、どこかで自助を働かす知恵を持っている。それでも行き場のない人は偏つ

訪問看護でできることには限定や限界もある。医療現場が専門化され細分化されていることで、患者さんをまるごと看ることができなくなっている現状では、治療契約に沿わない患者は行き場を失う可能性も高い。在宅医療は医療の必要性を理解して患者になつてもらうことから始まる」と話す。

起業・創業が求められる

黒川さんは、「息の長い起業・創業を考える時期に来ているのではない」と提案する。「現在、社会から排除されネガティブな経験をしてきた人たちが、ある場所に戻つても結局は同じ。同じ風景を繰り返して体験しているだけで、社会の認識はまったく変化していない。排除した場所に彼らを戻すだけだから」。

江頭さんは「自分の身の置き所が定まらず、また定める方法も知らない。そして自分に変化を求めない場所に戻って行く」

た人脈(たとえば裏社会、貧困ビジネスなど)を頼って、結局は孤立していくんやね」と応える。

「一般人が失業や借金など大ピンチになった時は、まずは肉親、知人を頼ったり、仕事を探しにいったりで、何とか経済を成立させ、生保申請にはすぐにはいかないことが多い。野宿をしても、生活保護を拒否する人は少なくない。とことん生活が出来にくい状況になる中で、社会や対人関係から見捨てられたという体験や実感を持つ人々には、まず対人関係や信頼回復が必要だ」と黒川さん。佐々木も「生保をゴールにするのではなく、彼らが生きる尊さを持つて何かがほしい。何でも与えることで、彼らへのサービスをあたりまえにしてきた僕らにも責任はあるが、『案塾』のように学びや遊びの中で自己投資をしたり、生活保護から抜ける方向を作ってきたことも大事な作業だし、それを応援することが僕

と話す。自分で考え、自分で答えを出す、出した答えに責任を負うことを求められない場所とも言えるだろう。それは自分の資質だけではなく、従来の価値観の中で、いつまでもマウスのように動き回る自分に、絶望を感じている男の姿を見る、ということだろうか。

黒川さんは新しい起業や創業を実践していく必要を語った。「運動やソーシャル・インクルージョンというような原理を語るのではなく、自分たちが当事者たちとともに起業していく何かを考えることだ」と。私もそう思う。私たちの世界は常に誰かにしてもらって、任せることが普通になっていて、このままでは支配、被支配の関係性はなくならない。現在のような生活の隅々まで商品化され、均一化した生活を強いる社会にも対抗して行くことができない。小さくとも確実に、自分たちの仕事をつくることを真剣に考えたいと思う。

(佐々木)

サウスオブミナミ

vol.03

まちと空き地のカタチ

はっきりとまちなかに顔を出す空き地。街区や地形、そこに建っていた建物など、まちのカタチにより、空き地のあらわれ方も様々です。その昔なにかあったのか？これらになにか建つのか？いろんな記憶と創造が繰り広げられるロマン！あふれる空間かもしれません！今回は、そんな空き地の特徴をさぐりながら、新しいまち動きの予感をキャッチしてみたいと思います。



工場型巨大空き地



長屋型土だけ空き地



長屋型補弱フェンス空き地

まちなか空き地20選!

いろいろある空き地に特徴をあらわす！新しい名前をつけてみました。ほかにどんな空き地があるかな？

名づけのルール：○□型□□空き地

○□型：もともとの建物や土地、空間のカタチを表現

ex.長屋型（解説：長屋が建っていたつなぎの床空間）

□□型：特徴的なイチョポイントを表示

ex.物干し型（解説：フェンスを物干しとして活用）

※基本ルールで、応用型もあります



工場型安全+第一空き地



長屋型平屋空き地



長屋型物干し空き地



番犬見守り空き地



鉄道高架型三角空き地



商店街型カーテン目隠し空き地



町工場型広々空き地



パッチワーク壁面空き地



長屋型雑草雪隠空き地



長屋型新旧対比空き地



のこされ地蔵の空き地



文化住宅型果樹空き地



文化住宅型通り抜け空き地



たてよこ碁盤目状街路
計画的に街路を敷いたタイプ。長屋などがのこされていると、雰囲気のあるまちなみを楽しめる。

地形反映型ぐにやぐにや街路
地形にあわせて有機的に街路がのびるタイプ。高低差やカーブなど、歩くとびに展開していく風景を楽しめる。

いろいろミックス街路
計画的な部分と有機的な部分が混在するタイプ。新しいまちと古いまちが併存するパターンが多い。

長屋と長屋の間に補綴。
暮らしの中のひと工夫を発見!!

上町台地の坂あり度あり!!
フシギな形の空き地を発見!!

ちんちん電車が走る住宅街
実のなる大きな木を発見!!

リレーなびトーク

No.03

「西成ではたらくパパ・ママたち」

プロフィール



榎月智子
家では0歳と2歳の女の子を子育て中。仕事では「ガニ」というニッケイネーでたくさんの子どもの親れるおねえちゃん・おかあちゃんといった存在。家庭と仕事の両立に奮闘中の「バワフルがあちゃん」です。



西野伸一
家では3人の子どもに囲まれ、仕事ではたくさんの子どもに囲まれ、日々、東大阪から西成のわかくさ保育園に通うバワフルパパ。

「リレーなびトーク」の第3弾は、パパとママのトーク。今回のゲストは、わかくさ保育園と同じ西成区の萩之茶屋にあるこどもの里の榎月智子さんです。そしてホストがわかくさ保育園の西野伸一さんです。2人はともに子育て・子育て支援に取り組む仲間であると同時に、お互い子育て中のパパとママ。そして榎月さんのお子さん、わかくさ保育園に通っているという不思議な縁を持つ2人が、にしなり☆あそぼパーク in 南津守中央公園や保育園の送迎時などでトークしました。

- ☞ **西野**：あらためてトークとなると変な感じやんね？
- ☞ **榎月**：そうやんね。何を話したらいいんやろ？この2人で話すとかなりディープなトークになるんじゃない？(笑)
- ☞ **西野**：それもいいですね。ガニ(榎月)と出会った時は「本当に熱い人やな〜」っていうのが印象。子どものためやったら「いつでも、どこでも」動く。そんな姿勢に驚きと感動やったよ。親身になったらとことんっていうイメージがあるわ。
- ☞ **榎月**：にしっぺの第1印象は「とにかく明るくて人をよせつける人やな〜」。この人の周りにたくさんの子どもや大人が集まるの、なんかわかるな〜って。自分の生活は後回しで、目の前の子どものたちのことを親身になって考えて。だから結局走り回ってはるな〜と思ってます。
- ☞ **西野**：あちこち走り回ってるよね・・・。
- ☞ **榎月**：たぶんやけどにしっぺはかなり似てるタイプ(働き蜂)だな〜？って感じてます。だから健ちゃん(夫)に時々怒られるんやけど(苦笑)
- ☞ **西野**：男女問わずリレートークに登場した人はみんなパートナーには、なかなか頭上がりませんか？(笑)。
- ☞ **榎月**：そうそう「いつでも、どこでも」っていったら僕らの取り組む「わが町にしなり子育てネット」の合言葉やん！
- ☞ **榎月**：そう「いつでも どこでも みんなで子育て」

あそぼパーク(以下あそパー)の時って子どもも親もめっちゃ楽しそうにしてる姿を見るから、やっぱり地域の公園でもいっきり遊ぶのって大事になって思う。こういう活動が日常的で地域の親子にとってもっと身近な形になったら更にいいなって思う。

- ☞ **西野**：「あそパー」やつながり事業の「びよちゃんネット・バンク」などの子育てネットの活動が、どうやったらガニが言うようにもっと「日常的で、身近」になるんやろね？
- ☞ **榎月**：何よりまずたくさんのお母さんに知ってもらって、活動に広がりを持たせることが大事やと思ってる。そのためは「お母さん目線」にたつてニーズを考えることが私たちに必要やと思ってるけど、どう？
- ☞ **西野**：「お母さん目線」めっちゃ大事やな！子育て・子育てのパートナーでありたいよね。でも子育てと仕事の両立大変なこともあるよね？自分の子どもとの時間も大事にしたいよね。
- ☞ **榎月**：実は、朝の保育園行くまでの自転車の時間で一緒に歌ったり、お互いに突っ込みあったり(笑)とか、夜寝る前の絵本を読む時間とかを大事にしてる。一日はあつという間に過ぎていくけど(笑)
- ☞ **西野**：充実って感じがします。お母さん目線といえば授乳の期間が終わるのって寂しいかもしれないけど、またそんな時は飲んで語りましょう！
- ☞ **榎月**：確かに授乳って今しかできないのすごい貴重な期間やと思う。しかも授乳に行きながら仕事させてもらっているものすごくありがたい。またいっぱい語りましょうね！
- ☞ **西野**：ほんまやね。保育園に元気に登園してくるのを明日も待ってます！

今回はホストを榎月さんへバトンタッチ！

湯かげん

部落解放同盟の「挑戦」を読む

部落解放同盟大阪府連が「新しい部落解放運動への挑戦」(以下「挑戦」と略す)という提案を発表した。15年前に示した「部落解放運動には夢がある」の改訂版で、運動の中期目標のようだ。ボクは、「挑戦」のコンセプトを、「共感」「新しいセーフティネット」「運動の総合的展開」の三つだと理解した。

「共感」を掲げたのは、この15年、「共感」されない現実―①一連の不祥事で「言行不一致」が露呈した、②人生いろいろ、部落もいろいろ、運動もまたいろいろと「多様化」した、③ハトとタカ、資本と労働など、二項対立で動いた社会も「多文化化」し、新しい秩序を探して混沌と

してきた―が進行してきたと認識しているからだろう。「失敗」と「違い」と「混沌」が運動の枷(かせ)にもなっているが、価値観を転換すれば「糧(かて)」にも変わる、その姿を見れば新しい「共感」が生まれると思う。

「セーフティネット」とは、「人権」と「福祉」のことだ。何が「新しい」かという点、「人権」では、部落差別の後遺症は癒えつつあるが、発生源そのものは除去されておらず、これを封じ込め、予防していく「部落差別の克服」というリアルなテーマを設定し、抽象的な「完全解放」に代えたことが「新しい」。そして、「法制度(社会変革)」「ま

ちづくり(人間関係変革)」「文化(自己変革)」の三つの領域で、ひとつひとつ実践を積み重ねていくとした。「福祉」では、この15年で、部落には「高齢化」「貧困化」「流動化」「空洞化」が進行しているが、「社会的排除」という社会共通の課題でもあるという認識が「新しい」。そして、「自助/共助/公助」を組み合わせた「新しい協働(社会的包摂)」を創るとしている。「克服」という転換は興味深いし、自助、共助にまで踏み込んで、我が国の福祉を問い直すこと、これは、時機を得ていると思う。

「総合的展開」とは、部落解放運動は部落解放同盟だけの「専売特許」ではないと宣言したと読んだ。一つは、社会福祉法人やNPOなど「社会的企業」が部落に育ってきたこと、二つは、「みんな(部落)」で差別と闘うのも、「一人(部落外)」で闘うのも同じ部落解放運動であること、三つは、議員は「組織内候補」の枠を超えたものに

なっていること、四つは、府連という存在はいまや様々なネットワークから成る事業体になっていること、この「総合力」を対等に評価したという意味で、「新しい」発想だ。府連が会費の改訂に着手し、支部と支部員の関係を「連帯分担金」に変えたのは、タテ型になっている運動組織をヨコ型に転換しようとするものだろうが、斬新な着想だ。会費が持つ経済効果は小さくても、解放運動という「コミュニティの経営」を問い直す喫緊のテーマだと思ふ。



富田一幸
富田代表取締役

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。



【田岡秀朋】6月16日に特別の「特区」でない、お得な「特区」が芦原橋で始まります。その名も「芦原橋アップマーケット」。5月号で紹介したファームも出店します。お近くの方、ぜひ。



【高橋伸吾】3歳になる息子をつれて、あそパーへ。消防車に乗ったりバクカー車体験したり、とても楽しそう楽しそうでした！



「一億玉砕」などという戦陣訓を背景とし、教養の徹底や忠君愛国の大義を叩き込まれ、暴力の正当化を許容してきた。戦後、例えば「人間の条件」(59、61年)、「暁の脱走」

青春の一時期を軍隊で過ごした父、兵士たちの規律である「親私率公」(「一億玉砕」などという戦陣訓を背景とし、教養の徹底や忠君愛国の大義を叩き込まれ、暴力の正当化を許容してきた。戦後、例えば「人間の条件」(59、61年)、「暁の脱走」

枝葉末節

漫画少年 その3



hidarimaki こと佐々木です。枝葉末節とはどうでもいいこと。人生の全ては枝葉末節でできているんだよ。

これらに共通するのは先輩後輩権威や位階などにすぎない絶大な権力を背景にしていることだろう。軍律は上下の階級性を正当化した制度

「50年」、「ゆきゆきて、神軍」(87年)など、軍隊の暴力を暴いた映画作品は数知れず、初年兵や二等兵らにたいするイジメや暴力が日常化していたことをフィルムからも知らされる。

経済原理やグローバル市場をうたい、売上げ至上をめざすツールとしてのメンタリティー(精神の発揚が恫喝や脅迫を生む)が、企業や団体、学生運動などの組織運営にも引き継がれた。戦後の農大ワンダーフォーゲルや、共産同赤軍派の山岳ルート事件などが勃発したのも同根だと思

であり、組織に共通するものでもあり、関係者のみが納得し、あるいは納得させられていく密閉の社会だ。つまりは従属する人間に文句を言わず、反抗を認めないとする絶対性で成立している。その原理は、指導する。根性をきたえる。愛のむち。であり、お前のためという体罰が「慈愛」にすりかわり、私怨や嫉妬や気分を振るう暴力という私情を隠してしまう。こうして暴力は強いものから弱いものへ、そしてさらに弱いものへと下流化し、恫喝や脅迫といういじめが組織から個人生活にまで蔓延し、いまやクラスカーストなどという言葉まで生んだ。

絵画や文学、音楽は人間の自由を鼓舞する分、比較的暴力や脅迫強要などとは遠い距離にあるが、その代わり権力に取り込まれやすい。スポーツは競争や勝敗原理で成り立つために熱狂しやすく、ときに強者(ヒーロー、ヒロイン)をたたえ仇役を作る。しばし国の命運を変えてしまふこともあった。第一次大戦におけるスポーツ振興である「武運長久」を旗印にした日本しかり、ナチスドイツのオリンピック祭典なども

めた結果の泥沼であった。気合や氣勢、精神論はいずれ疲弊する。私たちは、「あの体罰があつて今の自分がある」といった指導者有効論や、体罰の必要をよく聞かされる。私自身は体罰の背後には制裁という、力を持つものだけの特権を感じてしまふし、特権者だけの独善を見てしまふ。

「フアイト！」
朝：目が覚めてまだ寝たいなありって思うけど、我慢して起きたらお日様にほめられた。
昼：ご飯を食べてまだもうちよつと食べたいなありって思うけど、我慢したら昨日より少しスリムになっていた。
夜：愉快なテレビはまだまだずっと見ていたいなありって思うけど、我慢したらお月様が優しく子守唄を歌ってくれた。
我慢って辛いことかも
我慢って得することかも
我慢って辛いことかも
我慢って得することかも

スポーツの場合、指導する側とされる側が、水平な立場をどうして取れないかと思う。それがスポーツをもっと楽しくのびのびとする要だとも思うし、教育というものの本質ではないのか。
漫画少年というテーマが、思わぬ方向に展開してしまつた。私の絵や漫画への表現行為が出来たのは、親父たちの理解にあつたことは間違いない。しかし、少年時代に受けたイジメや、父の鉄拳と威圧は恐怖の核心を形成したことも事実だつた。(この項終り) hidarimaki



渡船
木津川や安治川、尻無川など、住民の足として運行されている公営渡船。無償で歩行者と自転車が利用できる。
大阪渡船場マップ
<http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000011242.html>



普段着の船旅

自動車が行き交り迫ら一本細い道に流れて堤防を越えようと、それを乗り越えなかつた(加藤朋面)。ブルブルブルとエンジン音がなり響くと向こう岸から一隻の船がゆつくりと近づいてきました。
水の都「大阪」に属する航路の渡船があり、木津川が流れる西成にも場所で行中である。夕方の車の高校生を運ぶの人はちが次々と自転車を押し、て乗り込んでいきます。「あの橋をのびって渡るのなんて思わね、こっこのほうが楽やし」と話しかけてくれたおじさんの言葉通り、すぐそばに架けられた橋は高さ36メートル(なんとビル12階分の心臓破りの坂)。15分間隔で行き来する船は地域の人たちでいっぱいでした。
文：平川隆啓 写真：高橋静香

ピースのつぶやき



ピースの育ての母の赤井まゆみです。ピースがお喋りしたい事や思っている事を、これからもたくさん感じ取って、みなさんにお伝えしたいと思っています。

赤井まゆみ



【四井善介】10年以上間わり続けていても、入り込まないとわからないことがたくさん出てきて、この街の魅力、奥深さを改めて実感しています。



【飯田沙保里】先日、ファーベでランチをしてきました。先月号の写真に載っていたフォカッチャがとてもおいしかったです。



思ったら！ にしなりカレンダー

マーケットめぐり

芦原橋アップマーケット

レザークラフトを中心にオーガニックやこだわり食材、手しごとをたくさん集めたマーケットが芦原橋でスタート！

JR 環状線芦原橋駅徒歩 2 分・西成からも自転車圏内の場所、いろんな逸品をたのしめます。

2013 年 6 月 16 日(日) 10:30-16:00
(以後、第三日曜日に開催)

会場：大阪市浪速区浪速東 1 丁目 7 番街区
主催：芦原橋地域再生推進協議会
企画：一般社団法人リイド
<http://reedjp.org/up/>

ギャラリーめぐり

展示会@ギャラリーあしたの箱 『コラージュ・デ・アソボ』 ～山本佳世作品展～

ノスタルジックでちょっとシュール、そして少しくスッと笑えるコラージュ作品です。
期間中は、ワークショップなども開催！

2013 年 6 月 8 日(土)～16 日(日)
13:00-19:00

※最終日 17:00 まで 6 月 12 日のみ休廊
※作家在廊：会期中の木・金・土・日
場所：ギャラリーあしたの箱 (西成区岸里東 1-6-7)
tel：06-6659-8892
<http://www.ashitanohako.com/>

アーケードめぐり

アーケード歩き@鶴見橋商店街

鶴見橋商店街 7 番街には、ビクトグラム (絵文字) がいっぱい。お店や道案内など、デザインされたビクトグラムが商店街をいろいろっています。

場所：西成区鶴見橋 3 丁目界隈

アーケード歩き@玉出商店街

通称：シラカベにはいろんな作品が随時展示中！
子どもたちがつくった巨大マップや作品など、いろんな世代をつなぐ情報掲示板。

場所：西成区玉出中 1-2 丁目界隈

サイエンスカフェ@動物園前一番街

サイエンスカフェの定期開催が決定！
暮らしやまちづくりをもっと身近にたのしむためのお話が聞けます。今回は「観光と商店街」。
動物園前サイエンスカフェ「観光まちづくりをかんがえる～新今宮周辺・商店街のこれから～」

2013 年 6 月 29 日(土) 16:00-18:00

場所：動物園前 1 番街アーケード
話題提供：松村嘉久さん (阪南大学教授)
参加費無料・申込み不要
主催：動物園前サイエンスカフェ
<http://enmae12science.blog.fc2.com/>

あとがき

今日もどこかに出発しながら、あれやこれやと
ナイスな視点で？なびのネタさがし。そして、編
集長からますます忙しくなるとつつかれる
日々。どっこい、なんやかんやでリニューアル 3
号を無事むかえることができました。みなさまか
らいろいろな声をいただきありがとうございます。
ちょっとずつこれまでの西成をこえてジワジワ
と内容を深めていければと思います！(平川)

なび 6 月号 (vol.76)

発行日：2013 年 6 月 10 日 (創刊日：2007 年 1 月 1 日)

発行：株式会社ナイス

発行人：代表取締役 富田一幸

印刷：有限会社前山企広

住所：大阪市西成区長橋 3-6-33 電話：06-6563-1156

E-mail: info@nice.ne.jp url: <http://www.nice.ne.jp/>

編集長：佐々木敬明

編集：田岡秀朗、平川隆彦、四井恵介、飯田沙保里

イラスト：hidarimaki

デザイン・表紙写真撮影：高橋静香

(表紙の写真は「あそび in 南津守中央公園」で撮影しました。)